

東京湾北岸における暖候季の『南風』について

大小田 恵子

暖候季関東地方南部に長時間継続して吹く南寄りの風を『南風』とし、『南風』吹走時の東京湾北岸地域における詳細な地上風系の分布を明らかにすることを試みた。

データは地域気象観測（アメダス）風向風速毎時月報および千葉県大気環境常時測定結果（月報）を用い、調査地域は市川市、浦安市、船橋市、鎌ヶ谷市、八千代市、習志野市、千葉市、四街道市、佐倉市とした。

まず、平成元年および昭和63年について、4～9月のアメダスの船橋の風のデータから、南または南南西の風が、平成元年は30時間以上、昭和63年は23時間以上、継続して吹く例を『南風』吹走時として抽出した。

『南風』吹走時の気圧配置には、①移動性高気圧の後面②台風の前線③小笠原高気圧の西の縁で（a）前線あり（b）前線なし、の4つがあることがわかった。②は平成元年だけ現れた。また、『南風』吹走時の船橋の風は、24時間前後を周期とし、日中風速が大きくなるような日変化をすることが分かった。

つぎに平成元年と昭和63年のそれぞれの『南風』吹走時の例を、気圧配置によってグループ分けし、各グループから継続時間の最も長いものを選んだ。さらに、選ばれた例について、ひとつひとつの日変化周期のなかで最も風速の大きい時刻を選んで、千葉県大気環境常時測定局のデータより風系図を作成した。それによりデータを吟味したところ、一部（港湾付近など）の観測地点に問題がみられたので、それらについては除外し、大局を把握するため流線図を作成した。

風系図と流線図から風系の特徴を調べたとこ

ろ、『南風』の風速が大きい場合の風系図および流線図から、『南風』吹走時の東京湾北岸における地上風系は、風向の共通性によりA：葛南地域西部、B：葛南地域東部～千葉地域西部、C：千葉地域東部の3地域に分けられることが分かった。細かい特徴は例によって異なるが、西成分が特に内陸部で強いB地域をはさんで、B地域よりやや西成分の弱いA地域と、風向の乱れがやや大きくB地域とは異なる風向が多く現れるC地域が存在するのが基本的な特徴である。

さらに、平成元年6月5日7時～6月6日21時（38時間）の例について、吹き始めから、3時間おきの風系図および流線図を作成して風系の日変化をおってみた。その結果、日中全域の風速が大きいときには3つの地域やその基本的な特徴が明瞭に現れ、夜間や早朝全域の風速が小さいときには境界線が不明瞭だったり現れなかったりすることが多いといえる。

このように狭い対象地域内でも、異なる特徴をもつ地上風系がみられるということは興味深く思われる。しかし、風系の特徴と地形や気圧配置の関連は、特に見られず、なぜこのような特徴が現れるのかについてはわからなかった。

本研究の問題点としては、例数が十分に多くないこと、船橋の東京湾北岸地域全域に対する代表性が、特に風速の面で不十分であること、『南風』吹走時抽出の条件の吟味が不足していること、などがあげられる。したがって、本研究で明らかになった風系の特徴の一般化や、そのような特徴を生じる原因などについては、今後の課題であり、より多くの年の例についての研究が待たれる。